



多様性支えた包容力

茨城県立竜ヶ崎一高 3

中国地域研究者 田島英一さん 1980年度卒

竜ヶ崎一高は、いわゆる「ガリ勉」だけが集まる高校ではないという。慶応大教授で中国地域研究者の田島英一さん(54)は1980年度卒。も、さまざまな個性を持つ同級生たちと机を並べた。「でも、そんな多様性を支えてくださったのが、先生方。皆がそれなりに自分の『居場所』を見つけたらいい学校だった」と懐かしむ。

【根本太一】

慶応で教壇に立っていません。研究、教育における信念は「良き批判の前提は良き理解であり、良き理解の前提は愛情である」。上から目線ではなく、現地に向き、同じものを食べて同じ匂いをかぐ。コミュニケーションを通して自らを啓発する。社会科学の基本だと思っんです。

高校時代はハンドボールに熱中していました。部員が少なかつたせいか1年の後半からはレギュラーです。ただ、当時ハンド部とサッカー部のグラウンドは丘と丘の谷間にあつて冬は日が当たらない。積雪は春まで凍ってしまふ。冬は練習そっちのけで雪かきに追われていたもんです。疲れて帰宅すると、寝転

んで本を読むのが日課でした。文庫本を20〜30冊ほど一度に買って2カ月ぐらいで読み終える。ドストエフスキー、トルストイ……。文学作品が中心です。日本の作家では芥川龍之介の文体が気に入って、芥川だけは全集を買いました。そんな毎日だったから、受験勉強というものを全くしていない。国立大には「共

たじま・えいいち 1962年生まれ。慶応義塾大学院文学研究科博士課程を単位満了で91年に退学。同大総合政策学部専任講師、助教授を経て教授。専門は中国市民社会論、宗教、NGOなど。著書に『中国人』という生き方〜ことばにみる日中文化比較(集英社新書)「弄ばれるナショナリズム」(朝日新書)など。



通一次試験(現センター試験)があつて、7科目勉強して受験できるのは1校。なら3科目で済む私立に絞ると、早々と学校側に宣言したんです。

それからですよ、「悪魔のささやき」が始まったのは。「国立優先」の意識が強かつたんでしょね。あの先生が「茨城大に推薦を出してやるからおっしゃる。断ると、数カ月して「筑波大ならどうだ」と。ちょっと待ってくださいと。大学ぐらい茨城を出て、外の世

界を見たいじゃないですか。最後は英語の大野英一先生が「おめ、絵がうまかつて? 東京芸大行かねが」と。さすがに苦笑しました。

結局、私立路線を通しました。しかし、いざ受験勉強を始めると、睡眠不足が胃にたたり、時々嘔吐するようになりました。慶応の受験会場でも、試験直前にトイレに駆け込む有り様。よく受かつたと思います。そんな状態ですから、3年の後半は遅刻がちで、午後から登校、という日もありました。それでも先生方は大目に見てください。

浪川商店のゴムそば



1967年当時の浪川商店で善次郎さん(左)とさたさん夫妻—浪川家提供

部活帰り 胃袋満たす

正門を出て石段を下りた通学路に、竜一生の胃袋を満たしてくれた「浪川商店」があつた。太平洋戦争の空襲で東京から疎開してきた浪川善次郎さんが、1952年ごろに開業。行商の女性に東京から持ち帰っても

らった食パンにマーガリンを塗って売り始め、後に妻さたさんが調理した食事を提供する。一番人気は焼きそばだ。冬になると作り置きが冷めてぼそぼそになっていたのか、誰からともなく「ゴム

そば」と呼ばれるようになった。揚げたソーセイジを挟んだパンは「肉ぼっか」。夜遅くにはコロケや天ぷらなど、残り物の総菜を盛った全部乗せうどんもあつた。コンビニのない時代。部活帰りの生徒たちであふれた。

善次郎さんが77歳で引退した後、95年まで店を続けた嫁の幸子さん(88)は「日曜にシャッターを閉めていても、裏口から生徒が入ってきたと懐かしむ。「軽口もたいたいて。皆さんを孫のように可愛かつた」(幸子さん)という老夫婦を、結婚披露宴に招待した卒業生もいたという。善次郎さんは99年に88歳で、さたさんも今年1月に98歳で世を去ったが、浪川商店の「伝説」は今も語り継がれている。

何度も通つた77年度卒の地方公務員、大野雅之さん(56)は、自身の電子メールアドレスの一部に「gomusoba」と取り入れている。

次回回は23日に掲載します